

英国文化論考：『チャタリー夫人の恋人』に 描かれたロレンスの故郷での場合

武田 光史

要 約

世界に先駆けて産業革命を為し遂げ七つの海を支配した英国の近代機械・産業文明の発展とは反比例するかのようには破壊され消滅していく自然の森林と田園。それはかつて英国の中部一帯に広がっていたロビン・フッドの活躍したシャーウッドの森とて例外ではない。

そこで現在わずかに残存しているその森の一部を含めてロレンス自身が「わが心のふるさと」と呼んだ生まれ故郷イーストウッドが、彼の最後の小説『チャタリー夫人の恋人』の中にどのように採り入れられ、どのように描写されているかを考察することにより、英国文化の偉大なる伝統が如何なるものであるかのその一端なりを論じてみる。

キーワード：英国文化, 『チャタリー夫人の恋人』, D.H. ロレンスの故郷, イーストウッド,
古き良き時代

I

処女作『白孔雀』(1911)から自伝的要素の特に強い『恋人のような息子たち』(1913)を初めとしてロレンスの作品には、イングランド中部地方、さらにその中心部に位置するロレンスが生まれてから小学校教師となってロンドン南郊のクロイドンへと赴くまでの21年間を過ごした故郷イーストウッドとその周辺の地が、色濃く反映されている。その中でもとりわけ最後の小説『チャタリー夫人の恋人』(1928)においては、

More perhaps than any other of Lawrence's works, *Lady Chatterley's Lover* presents problems to the reader attempting to identify originals of the places it describes in the English Midlands...¹⁾

と説明されているように、ロレンスの故郷の地がこの作品の中でどのように描き出されているかを順を追って辿りながら考えることにより、英国文化の伝統が何であるかを論じてみたい。

ロレンスの生まれ故郷イーストウッドについては、

I was born nearly forty-four years ago, in Eastwood, a mining village of some three thousand souls, about eight miles from Nottingham, ... To me it seemed, and still seems, an

extremely beautiful countryside, just between the red sandstone and the oak-trees of Nottingham, and the cold limestone, the ash-trees, the stone fences of Derbyshire. To me, as a child and a young man, it was still the old England of the forest and agricultural past; there were no motor-cars, the mines were, in a sense, an accident in the landscape, and Robin Hood and his merry men were not very far away²⁾.

と死の前年の1929年に懐かしく思い出しながら語っているように、南東部の州都ノッティンガムから路線バスに乗って40分余り、北からだとマンスフィールドから50分足らずで、また同じ路線バスで南西部のダービーからでも1時間余りという所に位置している。市場、図書館、郵便局、銀行などを中心にした街並がほぼ東西に走っている小高い尾根に沿ってわずか300メートルほどの長さで続いている小さな町である。ノッティンガム・ロードというその街路の南面はなだらかに傾斜してから広々とした平野が広がっているという何処にでも見られるごくありふれたイングランドの地形であるが、しかしその北面はイングランドにしてはかなり急勾配に傾斜してから谷となり、貯水湖からの水がほぼ東から西に向かって小川となって流れており、その北側はゆるやかな斜面をなして牧草地が広がっている。右方にはロビン・フッドの伝説で知られるシャーウッドの森の続きであったハイ・パーク・ウッドの森が残存しており、左方には手前にSAFEWAYの大きな看板のスーパー・マーケットが出来て自然の景観も破壊されてはいるが、なだらかに波打って広がる丘の間に間にクリッチとアンダーウッドの村々を眺望することが出来、実にのどかで心の洗われる思いがして何度見ても厭きることのない眺めなのである。

1926年9月に妹エイダの住むリプリーから生誕の地イーストウッドへと最後となった帰郷をしてから、イタリーのフィレンツェ近くのヴィラ・ミレングで『チャタリー夫人の恋人』の初稿 *The First Lady Chatterley* の執筆にとりかかっていたロレンスは、後の希求したラーナーニムの理想郷に共鳴して実際に農場を経営してそのユートピアの実践をも試みていた友人宛の書簡の中でもまた、

... go to Eastwood, where I was born, and lived for my first 21 years. Go to Walker St — and stand in front of the third house — and look across at Crich on the left, Underwood in front — High Park Woods and Annesley on the right: I lived in that house from the age of 6 to 18, and I know that view better than any in the world. ... That's the country of my heart³⁾.

と語っているように、幼い時より肺を病んですでに体力も衰えていたロレンスにとって、二度と訪れることのないであろう故郷が強く脳裏に刻み込まれていたのである。イギリス産業革命の象徴でもあったロレンス当時のムーアグリーン炭坑も父親アーサーの働いていたプリンズリー炭坑も高校・大学とロレンスがノッティンガムまで通った谷沿いの鉄道もすでに姿を消し、さらにノッティンガムからイーストウッドを経由して妹エイダの住んでいたリプリーまで通じていたダブルデッキの路面電車も今では乗合バスに取って代わってはいるが、まさにロレンスにとっては「世界中のどんな眺めよりもよく知っている眺め」であり、「わが心のふるさと」と叫んだイーストウッドとその周辺の地が、『チャタリー夫人の恋人』の中に採り入れられることによりどのような効果を発揮しているかをも考察してみたい。

II

CONNIE and Clifford came home to Wragby in the autumn of 1920. ... Wragby was a long

low old house in brown stone, begun about the middle of the eighteenth century, and added on to, till it was a warren of a place without much distinction. It stood on an eminence in a rather fine old park of oak trees, but alas, one could see in the near distance the chimney of Tevershall pit, with its clouds of steam and smoke, and on the damp, hazy distance of the hill the raw straggle of Tevershall village, a village which began almost at the park gates, and trailed in utter hopeless ugliness for a long and gruesome mile: houses, rows of wretched, small, begrimed, brick houses, with black slate roofs for lids, sharp angles and wilful, blank dreariness⁴⁾.

第二章の書き出しでのこの描写は、ラグビー館^{やかた}（実際にはラム・クロウス・ハウス）に視点を置いてテヴァーシャル炭坑（当時のムーアグリーン炭坑であるが、現在では同じ場所にコンピューター関連の会社が出来ている）からテヴァーシャル村⁵⁾を眺めたものである。この描写は地形的にも距離的にも現実の光景とほとんど同一であり、であるからこそ良くも悪しくも過ぎ去りし時代への郷愁の思いをより強く湧き立たせてくれるのである。と同時に44歳での死を目前にしてロレンスが描き出したこの虚構世界への愛着をより一層募らせ、想像力と夢をもより大きく膨らませてくれるのである。

このテヴァーシャル（いやイーストウッド）の様子については簡単にはあるが作品の中で繰り返して、“... the long squalid straggle of Tevershall, the blackened brick dwellings, the black slate roofs glistening their sharp edges, the mud black with coal-dust, the pavements wet and black. It was as if dismalness had soaked through and through everything. The utter negation of natural beauty, the utter negation of the gladness of life, ...” (p. 158)とか“... the shallow valley at the mine, and beyond it, the black-lidded houses of Tevershall crawling like some serpent up the hill.” (p. 187)と記述されており、さらにまたコニーをして“Why is Tevershall so ugly, so hideous? Why are their lives so hopeless?” (p. 189)とまで語らせている。ロレンスの生まれ故郷に対する印象は「家並は炭塵で黒く汚れて……丘の斜面に蛇のように這いつくばっており……住民には希望もなく」などと、明るいイメージでは決っていない。しかも“The industrial England blots out the agricultural England. One meaning blots out another. The new England blots out the old England. ... Fritchley was gone, Eastwood was gone, Shipley was going:...” (p. 163)とまで書かれているように、古い農業のイングランドは新しい工業のイングランドに取って代わり、実在のイーストウッドもこの地上からすでに消し去られてしまっているのである。

飲んだくれて粗暴ですでに七歳にして炭坑夫となっていた父親アーサーと敬虔なメソジストの信徒で見習い教師の経験もありダービシャー方言でなど決して話そうとしなかった母親リディアとの間での、しかも幼いパート（ロレンスの呼称）の目の前で繰り返されるのしりといたさかいたいがみ合い⁶⁾。生まれてから21歳までを4ヶ所も住居を変えながら過ごしたイーストウッドでの特に幼かった日々への思いは、懐かしさが募れば募るほど逆により一層惨めで暗いものとならざるをえず、決して明るいものでもなかったのも当然である。しかも1926年9月に最後となった生まれ故郷を訪れた時には炭坑労働者たちはストライキ中であり、女も子供もその他家族の者たちは飲まず食わずの悲惨な生活状態であったことをも考えるならば⁷⁾、ロレンスの描くイーストウッドのイメージはどうしても暗くて惨めで沈んだものとならざるをえなかった。

と同時にこの故郷の村の描写に現実性を持たせてより生き生きとしたものとするために、“... the Wellington, the Nelson, the Three Tuns, and the Sun, ... the Miners' Arms, ...” (p. 159)という記述に見られるように架空の名と実在の名とを並記するという手法をも用いている。これらのうちの the

Three Tuns (三大樽) はロレンスが6歳から18歳までを過ごした最も見晴らしの良いウォーカー・ストリート^{フラット}の住居からちょうど南のすぐ裏手にあり、結婚してからは酒を断つと約束したはずの父親アーサーがほとんど毎日のように入りびたっていたパブである⁹⁾。さらに the Sun (太陽) については "... that called itself an inn, not a pub, and where the commercial travellers stayed, ..." (p. 159) とユーモアをも込めて記述されているが、この地域では現在でも唯一の宿泊施設となっているのである⁹⁾。

そしていよいよロレンスはコニーの心に託しての愛着と憎悪の入りまじったアンビヴァレントで複雑な思いの丈でもって、古き良き時代への哀惜の念をも込めて、自らの寿命もあと幾許りもないことを悟りつつ、ふるさとを、イングランドを、精根の限りを尽くして謳い上げる。

Tevershall! That was Tevershall!

Merrie England! Shakespeare's England!

No, but the England of today, as Connie had realized since she had come to live in it¹⁰⁾.

シェークスピアの活躍していた古き良き時代という偉大なる英国文化の伝統の残る中部イングランド、それはロレンスにとってもまさしく 'the heart of England' なのであった。

工業化され産業化された近代文明の象徴であり、硫黄の臭いがただよって煤煙におおわれた現実のテヴァーシャル (いやイーストウッド) が暗と俗との世界とすれば、それとは対照をなす明と純との世界として、現代のアダムとイヴとの出会いの場となり従って現代のエデンの園¹¹⁾とも呼びうる森の世界をロレンスはさらに描き出す。

... Across the park ran a path to the wood-gate, a fine ribbon of pink... In front lay the wood, the hazel thicket nearest, the purplish density of oaks beyond. From the wood's edge rabbits bobbed and nibbled...

Connie opened the wood-gate, and Clifford puffed slowly through into the broad riding that ran up an incline between the clean-whipped thickets of the hazel. The wood was a remnant of the great forest where Robin Hood hunted, and this riding was an old, old thoroughfare coming across country. But now, of course, it was only a riding through the private wood. The road from Mansfield swerved round to the north¹²⁾.

この文章は第5章の初めで、2月の薄陽のさす霜の降りた寒い朝にクリフォードとコニーが羊の放たれている農園を通して森の中へと散歩に出掛ける場面の一部である。『チャタリー夫人の恋人』という作品世界を通してロレンスの故郷という現実世界への想像力をいやが上にも掻き立ててくれるのである。

南のイーストウッド方面からすると、ムーアグリーン炭坑跡を過ぎてからゆるやかな上り道を1キロほど行くと広い車道に出会い、その道を左にとってさらに1キロほど進むとハイ・パーク・ウッドの南入口に至る。すぐそばにレンガ造りで高い煙突のある中2階のコテージがあり、ロレンスが^{タイム・キーパー}獵園番メラーズの住居^{すまい}を記述した時のモデルとも考えられうる¹³⁾。さらにすぐ左手に井堰があり、北に向かって細長く奥の方まで湖が広がっている。なおこれが Moorgreen Reservoir であるが、森の存在を最大限に生かすためにであろう、このムーアグリーン貯水湖は『チャタリー夫人の恋人』に於てはロレンスの脳裏から完全に消し去られてしまっている¹⁴⁾。

ロビン・フッドの活躍した時代のシャーウッドの森つまり中部イングランドいやイングランド全体を

も被っていた大古よりの大森林が切り倒され破壊し尽されてほとんど消滅してしまつての名残りのほんの一部の森¹⁵⁾の中へとモーター付きの車椅子に乗ったクリフォードにつき添って散歩にと出掛けたコニーは、そこで獵園番メラーズとの初めての出会いをなしてわずかながら言葉をも交わす：“But you’ve been here some time, haven’t you?” “Eight months, Madam... your Ladyship!” (pp. 49-50)

クリフォードとのまるで生殺しのような生活に心身ともに衰弱しきっており、その後も度々森の中へと出掛けるようになっていたコニーにとって、“The wood was her one refuge, her sanctuary.” (p. 22)であり、虚飾と偽善の館ラグビー・ホールから逃げ出すことの出来る唯一の場所であった。そして春も近い三月になつての風の強いある日、コニーに代わってクリフォードの身の回りの世話をしてくれるようになっていた元看護婦で炭坑で夫を亡くしている未亡人のボウルトン婦人から、“Now why don’t you go for a walk through the wood, and look at the daffs behind the keeper’s cottage? They’re the prettiest sight you’d see in a day’s march. And you could put some in your room; wild daffs are always so cheerful-looking, aren’t they?” (p. 88)と言つて勧められる。コニーが一人だけで森の中へと入って行くと風も弱くなって、ハシバミの茂みの下には春の太陽の光を受けてクサノオが金色に輝いており、アネモネが淡い青色をなして一面に咲き染め、道のそばにはサクラソウがちらほらと黄色い蕾をほころばせようとしていた。コニーはやがて森の外れの空き地に出てから、純粋な生命の象徴としての野生の水仙を眺めるために、獵園番の住む石造りの家の裏手の方へと廻つて行つた。

「ダフを見にいらっしやいませよ」と言つてくれたボウルトン夫人の言葉を切つ掛けにして、またクリフォードに対してはそれを口実にすることも出来、コニーは翌日の午後もまた ‘some of the mystery of wild old England’ (p. 46) のなおも漂っている森の中へと出掛けて行く。しかし今度は獵園番の住居の裏手へ水仙を見にではなく、ジョンの井戸¹⁶⁾と呼ばれている泉の方へであった。泉の底には新たに雇つた獵園番によって小石が敷かれ、氷のように冷たくて澄んだ水が湧き出していた。そしてその泉とは、

... the status of a shrine, dedicated to the spirit of the forest, a symbol of sex, life and continuity with the past, ... it was a spot where Lawrence and his schoolfriends had spent many happy hours, and perhaps it was for what it evoked of the romance of childhood that he regarded it as the holy of holies of the forest¹⁷⁾.

なのであり、しばらくしてからコニーは立ち上がつて帰りかけようとしていると、右手の方から槌の音だろうかキツツキなのだろうか、木を叩くかすかな音が聞こえてきた。その音を辿りながらコニーが歩いて行くと若い樅の林の中に小道があり、その小道をさらに曲りくねつて進んで行くと古い檜の木々に囲まれた神秘的な小さな空き地と丸太造りの神秘的な小さな小屋 ‘a secret little clearing, and a secret little hut made of rustic poles’ (p. 90) が目に入った。人目を避けた閑かなその場所で獵園番が雉の雛を育てるための鳥籠を作つていたのである。年輪を重ねた檜の巨木に囲まれてのこの場所は、

The ground was fairly free of undergrowth, the anemones sprinkled, there was a bush or two, elder, or guelder-rose, and a purplish tangle of bramble: the old russet of bracken almost vanished under green anemone ruffs. Perhaps this was one of the unravished places. Unravished! The whole world was ravished¹⁸⁾.

すでにアネモネが咲き乱れて、ニワトコや、雪玉のようなテマリカンボクも咲いており、略奪も凌辱もいまだかつてされたことのない処女地であった。さらにその場所の片隅にひっそりと立っている小屋も

また 'a sort of little sanctuary' (p. 91) であり、コニーがメラーズと出会ってから何度も何度も確かめあうようにして性の交わりをなすことにより新しい生命を生み出し育もうとする神聖な場所にまで高められ象徴化されているのである。デヴァーシャル村の炭坑夫の息子だったメラーズは今や単なるゲーム・キーパー「獵園番」などではなく、森の守護神パン¹⁹⁾にも等しいウッド・キーパー「森の守」となり、そしてコニーは夫クリフォードに代表される頭だけの人間によって造り出された現代の物質文明には汚されも犯されもすることなく、命あふれる森の中でニンフ²⁰⁾となって乱舞し、自然の象徴としての森と一体化しようとする。

She was gone in her own soft rapture, like a forest soughing with the dim, glad moan of spring, moving into bud. She could feel in the same world with her the man, the nameless man, moving on beautiful feet, beautiful in the phallic mystery. And in herself, in all her veins, she felt him and his child. His child was in all her veins, like a twilight. ... She was like a forest, like the dark interlacing of the oakwood, humming inaudibly with myriad unfolding buds²¹⁾.

Ⅲ

『チャタリー夫人の恋人』に描かれたデヴァーシャルは実はロレンスの生まれ故郷イーストウッドである云々というよりもフィクションである以上、中部イングランド地方の何処にでも見られる英国文化の伝統としての典型的な田舎町の姿を描いたものと解釈すべきである。と同時にまた、

It is fairly widely accepted locally that *Lady Chatterley's Lover* is set in Eastwood with the familiar Lambclose House, now re-named Wragby Hall. Eastwood people refer to the game-keeper's cottage as one of the huts now used by woodsmen on the estate²²⁾.

と述べられているように、イーストウッドを抜きにしてこの作品を考えることも出来ないのである。現在ではパースプレイス・ミュージアムとなっているヴィクトリア・ストリート 8 A のロレンスが生まれた家、Bottoms(谷底長屋)と呼ばれた 2 番目の炭坑会社の社宅、北に広がる眺めは最高だが冬には冷たい北風をまともに受けるのでロレンス自身も Bleak House などと言った 3 番目のフラット、そして入口には小さいながらも玄関の間があり西側には中庭もついており母リディアが最期を迎えることになった 4 番目の家、これらを結ぶ案内線 'Blue Line Trail' が敷かれており、さらにそれぞれロレンスゆかりの場所には緑の説明板 'Green Plaque' も設置されており、まさに『チャタリー夫人の恋人』に描かれたデヴァーシャル(いやイーストウッド)をより鮮明に生き生きとしてリアルなものにしてくれているのである。

さらにまたラグビー・ホールのモデルは炭坑主の館だったラム・クロウス・ハウスではなくて、マンズフィールドのさらに北シェフィールドの近くにある Barlborough Hall であるとか、いやイーストウッドの西ヒーノア近くの Shipley Hall であるとかの意見もあるが²³⁾、ロレンスはそのどちらをも頭の中に思い浮かべながら、あくまで中部のイングランド地方での文化の殿堂としての中世よりの名残りの典型的な領主の館 (Manor House) を描きたかったのである。と同時にまた『チャタリー夫人の恋人』に描き出されている背景は地形的にも地理的にもラム・クロウス・ハウスとそれに続くハイ・パーク・ウッド以外には有りえないのであって、特に "On a frosty morning with a little February sun, Chifford

and Connie went for a walk across the park to the wood...” (p. 44) で始まる第5章、そして櫛の老木に囲まれた空き地の片隅にある小屋の中でコニーとメラーズの初めての性の交わりがなされる第10章を中心にしての冬から春への森の自然の移り変わりの様子は、数キロに渡って現在に残る森の中の遊歩道 ‘Public Footpath’ の光景そのままに、また幼い時から何度も何度も訪れたことのある者でないと描けないほど見事に、コニーとメラーズが交わる場面に勝るとも劣らぬ筆致でもって描き出されているのである。

無論のこと『チャタリー夫人の恋人』は「わいせつ」という判決によって発禁処分を受けた Phallic Novel であり、そのメイン・テーマはコニーとメラーズとの Phallic Tenderness を描こうとしたものである。また別の表現をすれば、機械・産業文明に抗しての「女と男のユートピア」を追求したものである。それに対して物語の背景をなす言わばサブ・テーマとしてのロレンスの故郷、とりわけ生誕の地 イーストウッドとその東北部にわずかに残存する自然の森ハイ・パーク・ウッドが作品の中でどのように描かれまたどのような効果を発揮しているのかを論考することにより、英国文化の一端なりを掴み取ろうと試みた次第である。

注 釈 (Notes)

- 1) Bridget Pugh: *The Country of My Heart*. Broxtowe Borough Council, Nottingham. 32, 1972.
- 2) Edward D. McDonald(ed): “Nottingham and the Mining Countryside”, *Phoenix*. Heineman, London. 133, 1936.
- 3) D.H. Lawrence: *A Letter to Rolf Gardiner*, 3 December 1926.
- 4) D.H. Lawrence: *Lady Chatterley’s Lover*. Penguin Books, London. 14, 1960. なお、本文中の全ての引用は完全版として英国で初めて出版されたこの版による。
- 5) 実際にはイーストウッドであり、それがなぜテバーシャルになったかは不明である。ちなみにマンズフィールドからの路線バスに「Teversal 行き」というのがある。つまりロレンスはかつて訪れたことのある Teversal を頭の中に思い起こしながら、それを Tevershall に変えて用いたとも考えられうる。また注22) のケンブリッジ版の「付録」では、“the name taken from the village Teversal in Derbyshire” (p. 454) とのみ記されている。
- 6) Keith Sagar: “Young Bert”, *The Life of D.H. Lawrence*. Pantheon Books, New York. 7-21, 1980.
- 7) コニーの相手メラーズもロレンスと同じ炭坑夫の息子であり、本文中でも “As everybody says, the Notts-Derby miners have got their hearts in the right place.” (p. 311) と簡単ながら同情と愛着の念でもって描かれていることをも付け加えておかなければならない。それが又他方ではコニーの夫クリフォードに代表される貴族階級への反感・憎悪ともなっている訳である。
- 8) Pub (Public House の略) というと、これ又英国の生活文化を代表するものの一つであり、大英帝国の繁栄と共に特にビクトリア朝の後期1800年の終り頃より増加している。現在では教会に取って代わって社交と憩いの場となっており、日曜を除いてほとんどのパブが朝の11時から夜の11時まで開店しているのである。日本での「赤ちょうちん」の数はいざ知らず、イギリス全土で10万軒、ロンドンだけでも2万軒ものパブがあると言われている。
- 9) 西に向かうノッティンガム・ロードがちょうど街並が途切れてから急に下り坂となってそこで南北に走っているマンズフィールド・ロードと交差した十字路の西北角に The Sun Inn は位置しており、薄汚れてくすんだ赤レンガ造りの2階と3階の2棟続きの建物で、1階がレストランと暖炉のあるパブ、2階と3階が宿泊部屋となっている。パブの裏手には小じんまりとした庭園もあり、地元産のキンバリー・エイルを味わいながら北にはあの見飽きることのない景色を眺め、さらに西にはゆるやかに谷を越えて一段と高く四角い教会の塔があり、毎朝市場の開かれる広場をぐるりと取り囲むようにして成り立っている Heapor の町——そこはもうノッティンガムシャーではなくダービィシャーなのだ——をも遠望することが出来る。
- 10) D.H. Lawrence: *Op. Cit.*, 159.
- 11) 山川鴻三:「エデンの園—『チャタリー夫人の恋人』」, 思想の冒険—ロレンスの小説—, 研究社, 東京, 207-243, 1974.
- 12) D.H. Lawrence: *Op. Cit.*, 44.
- 13) なお本文中では森の北側に位置しており, “the keeper’s cottage, a rather dark, brown stone cottage, with gables and a handsome chimney” (pp. 68-69) と記述されている。領主の大きな館マンションと庶民の小さな住居コテージとは今に残る階級国家としての両極をなす英国文化のもう一つの象徴でもある。
- 14) さらになおハイ・パーク・ウッドの所で左にカーブした車道はムーアグリーン貯水湖を過ぎてからゆるやかな上り坂となり、右手には背丈ほどもある生垣越しに牧草地がありその向こうに南北に細長く広がった湖と森を見渡すことが出

来る。左手には残念ながら大小さまざまな木立が繁っていてどっしりと重みのある2階建てのラム・クロウス・ハウスを見ることは出来ない。なお筆者は'94年から'95年にかけてのロンドン大学での在外研究時、2月と5月の2回、当地を訪れた。

- 15) 想像力を掻き立てイメージをより大きくより豊かにするためであろうロレンスはこの森に名を冠していない。実際にあるハイ・パークの森もそれほど広くはなく、また本文中でもメラーズが野兎の密猟者——ロレンスの父親アーサーも実際に野兎をよく捕獲してきたとのことだが——の見廻りを終えてからの記述に “But when he had done his slow, cautious beating of his bounds — it was nearly a five-mile walk — he was tired.” (p. 149) とある。
- 16) 『第一チャタリー夫人』(初稿)では “the little icy spring where Robin Hood used to drink” とか “the well was famous” と説明されており、さらに『ジョン・トマスとレィデー・ジェイン』(第2稿)では具体的に実在する “Robin Hood's Well” を使っているが、これだと余りに身近で生々しすぎるとロレンスは思ったのか、この決定稿ではごく平凡で、ありふれた架空の名前に変えられている。
- 17) Derek Britton: *Lady Chatterley the Making of the Novel*. Unwin Hyman, London. 110, 1988.
- 18) D.H. Lawrence: *Op. Cit.*, 97.
- 19) 20) 北沢滋久: D.H. ロレンスその文学と人生. 墨水書房, 東京. 263, 1973.
- 21) D.H. Lawrence: *Op. Cit.*, 144.
- 22) Michael Squires(ed): *Lady Chatterley's Lover and the landscape of the English Midlands*, Appendix to the Cambridge Edition of *Lady Chatterley's Lover*. 453, 1993.
- 23) Derek Britton: *Op. Cit.*, 284.

An approach to English culture: in the case of Lawrence Country depicted in *Lady Chatterley's Lover*

Terufumi TAKEDA

Abstract

Some of the scenes of predictive insight into the vicissitudes of England when the heroine Connie went out for a drive in Chapter 11 are quoted here as a substitute for the abstract of this paper, “The car ploughed uphill through the long squalid straggle of Tevershall, ... And between, in between, were the tattered remnants of the old coaching and cottage England, even the England of Robin Hood, ... England, *my* England! But Which is *my* England? The stately homes of England make good photographs, and create the illusions of a connection with the Elizabethans. ... This is history. One England blots out another. The mines had made the halls wealthy. Now they were blotting them out, as they had already blotted out the cottages. The industrial England blots out the agricultural England. One meaning blots out another. The new England blots out the old England. ...”

Key words : English culture, *Lady Chatterley's Lover*, D.H. Lawrence Country, Eastwood, the good old days

School of Health Sciences, Okayama University